

令和7年6月30日発行



五小だより

学校だより 7月号
東久留米市立第五小学校
校長 古矢 美雪



ふれあい月間

—自分も大切・友達も周りの人達もみな大切—

副校長 新野 妙子

校舎裏に咲く色鮮やかな紫陽花が季節の移ろいを感じさせてくれます。紫陽花の花のように見える部分は、実は「がく片」が集まったもの花ではありません。「装飾花」と言われるものです。本当の花は、「真花」といい、よく見ないと気付かなかったり、奥に隠れるように咲いていたりします。いくつかの「がく」が集まって、美しく咲く紫陽花の姿は、子供たちの姿と重なります。一つ一つの個性や輝きが集まることで、より大きな魅力となり、周囲を惹き付ける存在になるのです。

さて、先月は、「ふれあい月間」でした。6月初めの全校朝会で、校長先生が『ひとりぼっち』（作：くすのきしげのり 絵：ふるしょう ようこ）という本の読み聞かせを行いました。主人公のはなちゃんはひとりぼっちになりがちな女の子です。それなら自分からひとりぼっちになろうと開き直ろうとするのはなちゃん。そんなのはなちゃんも友だちの優しさに触れることで少しずつ心を開いていきます。この絵本には、「自分も大切・友達も周りの人達もみな大切」という本校の合言葉と通じるメッセージが込められており、子供たちにも、自分の個性も大切にしながら、友達の良さを見つけ、友達と一緒にいる心地よさを感じてほしいという願いが込められています。

ふれあい月間では、全クラスでいじめアンケートを実施し、困っていることはないか聞き取りをしました。また、人権に関する授業を通して、子供たちの人権感覚を育んでいます。

先日ある学級の道徳の授業で、「道夫とぼく」という題材を扱いました。サッカーが得意でない友達が仲間に入れてほしいと言ったとき、「ゴールキーパーならいいよ。」と答えた道夫。ミスばかりする友達をサッカーに誘わなくなった道夫の姿を通して、誰に対しても分け隔てなく公正、公平な態度で接することの大切さを話し合いました。子供たちからは、「やっぱり仲間外れはよくない。」「誘った方がいいのかな。」「ひどいことを言ってしまった。謝ろうかな。」などの意見が出されました。それぞれの登場人物や友達の考えをもとに、誰にでも公平に接することの大切さや難しさを考え、自分自身を振り返る時間となりました。

また、授業だけでなく、日々の生活の中でも子供たちが互いを認め合い、尊重し合えるよう、さまざまな実践をしています。例えば、高学年では、先生がほめるとき、叱るときの視点を掲示し、子供たち自身が「どんな行動が認められるのか」を意識しています。ほめる視点には、「人のために動いたとき」「苦手なことに挑戦したとき」「温かな言葉がけや行動をしたとき」などがあり、子供たちの前向きな姿勢を受け止めています。子供たちの活躍の場は、学習の場面以外にも当番や係活動、行事と多岐にわたっています。様々な場面で、友達と協力して成長しています。そうした中で、担任や他の先生、学級や学年、異学年の友達からも認められる経験は、自分自身の存在を味わい、自信につながっていきます。

学級の中には、「みんな大事な子 うれしいことも悲しいことも怒っていることも 言葉にして話していこう」と掲げている学級があります。「何でも話し合える雰囲気」は、自分の気持ちを大切にしながら、友達の気持ちにも寄り添う姿勢につながり、子供たちが「ここが自分の居場所だ」と感じる大切なきっかけとなっています。自分の思いを安心して伝えられること、そして誰かの思いを受け止められることは、「自分も大切、友達も大切、周りの人達もみな大切」という心を育む土台となると考えます。

ふれあい月間は、今後11月と2月に実施します。「自分も大切、友達も大切、周りの人達もみな大切」という思いの具現化に努めてまいります。保護者の皆様にも、今後とも温かいご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。